

ぞく 6ぴきのきょうりゅう

～おともだちがやってきた～

きょうもきょうりゅうようちえんから、げんきいっぱいのがきこえてきます。あおドン・しろドン・きいドン・みいドン・ももリン・あかリンの6ぴきです。

そこへせんせいが、知らないこをつれてやってきました。

「おはようございます。きょうりゅうようちえんにあたらしいおともだちがやってきましたよ。ぴかっピーです。みんな、なかよくしてね。」

「ハァーイ！」

やさしくてともだちおもいのあおドンは

「ぼく、ようちえんのことだ

いすきなんだ。きみもぜっ

たい、だいすきになるよ。」

といちばんにこえをかけました。

「わたしはうたがだいすきな。

いっしょにうたいましょうね。」

「せんせいもやさしいよ。」

あたらしいともだちがふえたので、みんなはとてもわくわくして、つぎつぎにこえをかけました。



あるひ、あおドンとぴかっピーがつみきのとりあいをはじめました。

「ぼくが、つかっているんだ。」

「ぼくが、さきにつかおうとおもってここにおいたんだ。」

「ぼくが、さきだ。」

「ちがうよ、ぼくのものだ・・・！」

ずっといいあっているふたりをみていたももリンが

「そうだ、じゃんけんできめたらどう？」

といいました。

「よし、じゃんけんでしょうぶだ。」

「ぜったいにかつぞ。」

「じゃんけん ぽん！」

ぴかっピーが、かちました。

「ヤッター、ぼくのかち！だから、このつみきはぼくがつかうよ。」

「・・・なんだよ、ぴかっピーなんか。みんなとちがってぴかぴかしているくせに！」

とあおドンが、いいました。

そのことばをきいたぴかっピーは、きゅうにかなしいかおになって、はしってへやからでていきました。まわりでみていたともだちも、ぴかっピーのかなしいかおにきがつきました。

「あおドン、なんてこといったのよ。」

「だって、みんなとちがってぴかぴかしているじゃないか。」

「でも、みんなきょうりゅうようちえんのなかまじゃない。」

「そうだよ。そんなことかんけないよ。」

「わたしはぴかっピーのいろもすきよ。」

「そうよ、きらきらしていてすてきじゃない。」

みんなにいわれてあおドンは

「うるさい、うるさい、うるさい！」

とって、とびだしていきました。

あおドンはプンプンおこりながら、かわらまであるいてきました。しばらくいくと、どこからかおんがくがきこえてきました。

「あっ、ぴかっピー！なにしてるんだろう？」

みると、ぴかっピーがひとりでくさぶえをつくってふいています。とっても
じょうずです。それに、とてもすてきなおとです。

「すごい、ぴかっピー。あんなことができるんだ。それに、こんなにきれい
なくさぶえのおともはじめてきくよ。」

あおドンはびっくりしました。しばらくして、ぴかっピーがあおドンにきづ
きました。

「あっ、あおドン。きみもやってみるかい？」

「えっ、いいの。ぼくもできるかな？」

あおドンは、ぴかっピーにおし
えてもらいながら、くさぶえを
つくってふいてみました。でも
なかなか、うまくふけません。

「やっぱりむりだよ。」

「ううん。ぜったいにふけ
るようになるよ。」

「うん・・・。」

ぴかっピーはあきらめそうになるあおドンをはげましつづけました。

ピィ～。ピィ～。 **ピィ**～。

「ヤッター、なったよ。」

「すごい、よくがんばったね。」

「ううん、ぴかっピーがずっとやさしくおしえてくれたからだよ。ありがと
う。」

そのとき、きのかげからずっとしんぱいしてきていたしろドン・きいドン・
みいドン・ももリン・あかりンが、ニコニコしてとびだしてきました。

「ヤッター！」

「がんばったね。」

「よかったね。」



「ぴかっピーってやさしいね。」

「もう、なかよしだね。」

「なあんだ、みんな。みていたの、ぼくたちのこと。」

「うん。だってぴかっピーが、かなしいかおをしていたからしんぱいになって……。」

「それに、あおドンもおこっていたでしょ。」

するとあおドンが

「さっきはごめんね、ぴかっピー。ぼく、なんだかいやなことをいっちゃったよ。だけど、ぴかっピーは、ぼくにとってもやさしくしてくれた……。」

「あのときはかなしかったけど、もういいよ。」

「ほんとにごめんね。」

「みんなもぼくにようちえんのこと、いっぱいおしえてくれたじゃないか。」

「あっそうか！」

「なんだか、おかしいね。」

「これからも、よろしくね。」

「うん。」

「ヤッター、なかなおり。」

きれいなゆうやけのなかで、いつまでもたのしそうにわらう7ひきでした。

